

[08] タンチョウの冬期自然採食地の創出

原田 修[○] (公益財団法人 日本野鳥の会 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ)
有田 茂生 (公益財団法人 日本野鳥の会 鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリ)
*現所属:根室市役所 根室自然野鳥観光推進員
竹前 朝子 (公益財団法人 日本野鳥の会 保全プロジェクト推進室)

北海道東部の湿地に生息するタンチョウは、給餌などの地元の保護活動により絶滅の危機から脱したが、個体数の回復に伴い、近年は給餌による人馴れや生息地の過密化などの課題が表面化している。公益財団法人日本野鳥の会は、給餌場に集まるタンチョウの密度を低減させること、新たな越冬地の環境条件を探ることを目的に、2008 年以降、タンチョウが給餌場以外で採餌できるよう冬期自然採食地の造成を行ってきたので報告する。

2008 年の冬にタンチョウの代表的な越冬地である北海道阿寒郡鶴居村内でタンチョウの分布や水辺の状況を調べた結果、給餌場以外でタンチョウが多く見られた所は、農地整備でできた明渠排水路や小河川などのうち、湧水により冬でも凍らず、かつタンチョウが歩けるような空間のある水辺だった。そこで、2009 年度以降、タンチョウが利用できるよう、水辺の不凍区域で障害物となる藪や岸辺の倒木除去などの環境管理を行った。

5年間でのべ 193 人のボランティアの参加により、18.5 人日の人工で 15ヶ所の採食地を整備した。整備環境の内訳は①農業排水路(7ヶ所) ②小河川(4ヶ所) ③普通河川(4ヶ所)であった。整備後にタンチョウの利用状況調査を行い、全ての採食地で利用が確認された。その個体数や頻度は、採食地の位置やその年の気象条件により異なること、利用頻度の高い採食地では、時間帯に関わらず利用されることなどが明らかになった。

また、作業に参加した地域住民や全国からのボランティアの方達の、タンチョウや湿地への興味関心の喚起や、理解の促進が見られ、環境教育面においても効果があった。

今後の課題としては、整備方法と利用状況の関係の解析、新たな候補地を選ぶための餌生物相など環境調査の充実、整備後の定期的な維持管理手法の確立などがあげられる。

本事業で得られたノウハウは、今後のタンチョウ保護に必要な生息地分散を考える上で、給餌に頼らない新規生息地での越冬環境保全のモデルになりえると考えている。なお、2011, 12 年度は富士通株式会社の技術協力を受けて計3か所の採食地にカメラと通信設備を設置し利用状況調査も行った。